

Hokkaido University Institute for the Advancement of Higher Education

ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構 Newsletter No. 104

北海道大学グローバルサイエンスキャンパス実践報告
「北大スーパーサイエンティストプログラム：SSP」

(3ページ)

2015年度IDE大学セミナー開催される

(9ページ)

大学IRコンソーシアムワークショップ,
セミナーが開催される

(18ページ)

「インターンシップ成果発表会」開催される

(20ページ)

サイエンス・カフェ札幌がグッドデザイン賞を受賞

(21ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

高等教育研修センター

高等教育推進機構 高等教育研修センター 副センター長 細川 敏幸

本年度4月に、高等教育研修センター（以下研修センター）が発足しました。研修センターは、ファカルティディベロップメント（FD）部門、スタッフディベロップメント（SD）部門、ラーニングサポート（LS）部門で構成されており、LS部門はアカデミックサポート室が名称を変更したものです（図1）。従来、全学向けのFDやSDは、主に高等教育推進機構の高等教育研究部と事務局の人事課が中心となって進めてまいりました。今回、研修センターとして統一し、ここを中心に事業を展開する運びと

なりました。もちろん、専任教員1名で多数の研修を担当することは困難です。従来担当していた高等教育研究部の8名の教員と人事課との支援を受けながらの出発となります。

7月には、文科省より「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点」として認められ、平成32年3月末

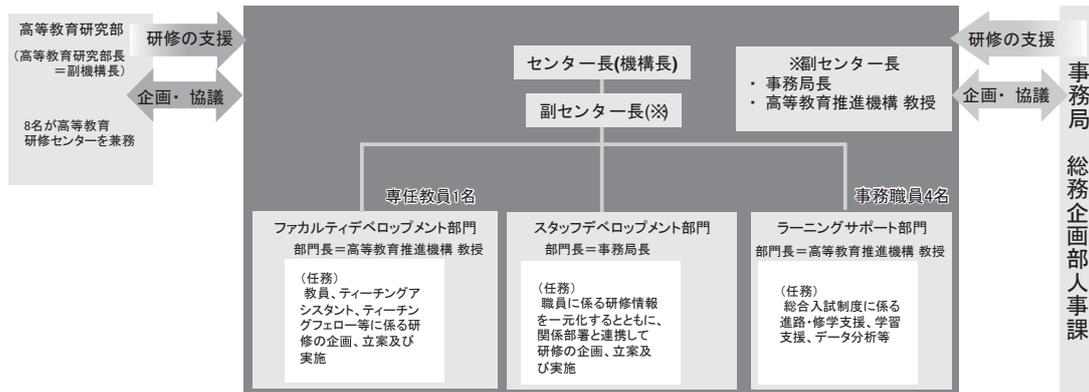


図1 高等教育研修センターの概要

まで北海道のみならず日本の研修の共同利用拠点として、研修センターの活動を展開いたします。本学での研修を実施するとともに、その多くを学外の教職員にも開放し、日本の高等教育の発展に資することが研修センターの新たな目的になりました。

ファカルティディベロップメント部門の活動

FD部門の研修は、教員ならびに大学院生を対象にしています。教員対象の研修であるFDは表1のように、キャリア毎に構成されています。新任教員は、アクティブ・ラーニングの手法とシラバスの書き方を学びます。中堅教員は教育制度改革の手法として、目標の設定から計画の実施までのプロセスを学びます。部局長研修では、本学の現状と課題を複数の視点から学びます。これ以外に、グローバル化対応研修として、発音力養成や新しい教育技術の紹介など多方面にわたる研修を実施しており、*印以外は学外の教員にも開放しています。本学特有の事

表1 FD部門の研修内容

研 修	対 象
教育ワークショップ	新任教員
中堅教員向けFD (教育改善マネジメント・ワークショップ)	中堅教員
部局長研修*	部 局 長
グローバル化対応研修	教 員
TF研修	院 生
全学教育TA研修会*	院 生
大学院生のための大学教員養成講座 (PFF授業)	院 生

*印は学内対象

情を学ぶ*印の研修も、その概要や手法は公開していく予定です。大学院生を対象にしたTF(Teaching Fellow) とTA (Teaching Assistant) のための研修や、将来教員になるためのPFF (Preparing Future Faculty) 授業も実施します。

スタッフディベロップメント部門の活動

SD部門の研修は職員を対象にしています。これまで実施してきた基礎的研修に加えて、FD同様にキャリア別の研修を計画しています(表2)。大学職員セミナーなどの基礎的研修では、職員倫理、大学管理、教育事業のマネジメント手法などを学びます。さらに、キャリア別研修では、係員相当職員(初任者)、係長・主任相当職員、課長相当職員を対象とした基礎力養成研修やUA (University Administrator) 育成講座を実施します。いずれも他大学の職員が受講できます。

表2 SD部門の研修内容

研 修	対 象
北海道地区大学SD研修 (大学職員セミナー)	職 員
キャリア別研修 課長相当職員、係長・主任相当職員、 係員相当職員	国立大学・ 高専等の職員
職種別研修	教務実務者
UA育成講座	主任・係員
ビジネススキルアップ研修	主任・係員

ラーニングサポート部門の活動

LS部門はアカデミックサポートセンターの業務を引き継ぎ、「ラーニングサポート室」として活動します。すなわち、個別対応をベースとした学習支

援ならびに進路選択支援、さらに総合入試以後の教育効果の検証を中心としたデータ分析を行います。4名の専門職員がTAとともにこれらの業務を実施します。昨年度の相談はのべ3000件を超えており、多くの需要に対応するために物理学と英語のゼミ（講義形式）の開催や、物理学学習のためのパンフレット配布など積極的な支援を行っています。

日本の高等教育の発展のために

この他にも、研修センターとして、全道的な組織である北海道地区FD・SD推進協議会や北海道地区学生指導研修会の運営を支援します。また、研修効

果の評価手法や認証評価の研究し、その研究成果と研修記録の配信をするとともに個別大学の研修企画の支援も行います。

このようにして、研修センターは北海道地区のFD・SDを推進し、大学教育の質を向上させるために、系統的に教育力を向上させるプログラム（PFU：Preparing Future University）を編成し、北海道地区国公立大学はもとより、全国の大学に提供いたします。皆さまのご希望に応じた多彩な研修を開催してまいりますので、ご支援とご協力をお願いいたします。

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

北海道大学グローバルサイエンスキャンパス実践報告 「北大スーパーサイエンティストプログラム：SSP」

平成26年度JSTの次世代科学技術人材育成事業「グローバルサイエンスキャンパス（GSC）」に、北海道大学の企画「地球と生命を理解する開拓力の開発」が採択されました。GSCは4年間のプロジェクトで、採択された大学は、卓越した意欲・能力を有する高校生を募集・選抜し、国際的な活動を含む高度で体系的な、理数教育プログラムの開発・実施

等を行っています。北海道大学では、この取り組みを独自にスーパーサイエンティストプログラム（SSP）と名付け、北海道教育委員会や札幌市教育委員会等の後援を受けながら、現在、2期目の受講生を受け入れ、日々の研究活動を支援しています。ここでは、その活動の様子についてご紹介いたします。

課題フレーム 1

地上生命環境

- スクーリング: 1週間程度（予定）
- スクーリング以外の期間は遠隔グループミーティング、適宜遠隔講義を実施
- 樹木や農作物を現場計測及びリモートセンシング（遠隔計測）することで、生命環境制御及び計測の新しい手法を開発する。
- 計測/データ例：世界最大規模の北大研究林または農場の農作物、雷神2衛星など室内実験例：作物や樹木の葉の成分分析、顕微鏡撮影
- 計測器例：スペクトル撮像装置、環境計測ユニット（気温、湿度、など。自作する）
- リモートセンシング例：人工衛星の画像データの解析、森林タワーからの撮像



図1 GSC事業において受講生が取り組む研究課題設定

はじめに

現代の科学研究は、ひとり研究室に閉じこもって行うものは少なく、外国も含めた外部との情報交換と刺激によって動機と目標が形成され、アイデアが生まれ、精力的な研究作業へと繋がっています。そこで求められる能力は、国際水準の研究作法、議論に耐える強い論理性、自らの意見を発信する積極性と表現力、研究協力者とのコミュニケーション能力、ひとつのことをやり抜く強い意思です。そして、創造力溢れる学問を開拓するには、物理、化学、生物、地学といった科目を独立のものとして捉えるのではなく、それらの関係性を様々なスケールで俯瞰する能力が重要になってきます。北海道大学のSSPでは、北大ならではの研究資産と地域性を活かし、こうした高度な能力を備えた研究人材を育成したいと考えています。それを実現するために、農学・水産学・森林科学・環境科学・地質学・宇宙科学などフィールド科学、物理・化学・生物などの実験室科学、それらを統合する情報科学など、それぞれの専門分野の教員からなるプロジェクトチームを形成し、一丸となって受講生の教育に当たっています。

2014年度の活動成果

既に、初年度のSSPでの教育・研究が実を結びつつあります。日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2015年大会において、北海道大学SSP受講生のうち4名が、一般セッションで講演を認められて登壇し日頃の研究成果を発表しました。JpGUの年次大会は、参加者が7000名を越える世界で三番目の規模を誇る学術大会であり、高校生セッションもあります。150を越える高校生セッション登壇者の中で、北大GSC受講生の高校生だけが、専門家や研究者が講演を行う一般セッション「環境リモートセンシング」での登壇となりました。発表スライドはすべて英語で作成しました。発表後、参加していた専門家から、「これこそ我々が求めているテーマです。」、「末恐ろしい」、「レベルが高いのですが、本当に高校生ですか?」とかなりの反響がありました。以下に受講生が発表したタイトルを示します。

1. リモートセンシングによるシカ食害地域の推定
2. リモートセンシングによるシカの食害検出のためのササのスペクトル計測

3. アオコの発生領域と原因の究明における衛星データの応用
4. ザンビアーカブウェとその周辺における鉛汚染の規模の調査

大会での発表タイトル及び発表概要 (英語、日本語) は下記リンクを参照してください。 <http://www2.jpgu.org/meeting/2015/session/H-TT29.html>

このように、北大SSP事業は、初年度から受講生のがんばりによって大きな成果を修めつつあります。



写真1 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2015年大会にて



写真2 JpGUでの受講生の口頭発表の様子

北大SSPの特徴

北大SSPの特徴は大別して2つあります。一つは、上述した、従来学問の枠を越えた複合的視点をもった自由度の高い研究活動に高校生に取り組んでもらう点です。今日の世界が抱える地球規模の難解な問題に対して、柔軟で創造的な手法をもって解決に臨む、高い意欲と国際性を持った研究者の卵を見出し、特別な環境を与えて育成します。したがって、高校生であるからと手加減はしません。教員自身ですらわからない、本来ならば大学院生が取り組む最先端

の研究課題を、受講生自らが研究グループを作って設定し、八ヶ月間かけて研究に取り組み、学会発表を目指します。もう一つの特徴は、ICTを駆使した研究活動を行う点です。北海道は、全国の地域の中で最も大きな面積を持ちます。交通機関の利便性が悪いために、道内に散在する優秀な高校生に最先端の研究現場を見せるために、北大まで日常的に通ってもらうのは、全国の他地域に比べ困難です。そこで、ICTによる双方向の講義・グループディスカッションを積極的に（週1回開催し、教員、TA、外国人TA、受講生が参加）取り入れることで、逆に遠隔での研究遂行のモデルケースを全国に先駆けて開発し、発信するという野心的な試みがもう一つの特徴です。

北大SSP受講生に求める能力

北海道大学SSPでは、以下の5つ能力を進展するための人材育成プログラムとなっています

1. 自らの意思を発信する積極性（意欲）と表現力
2. 海外留学レベルのコミュニケーション能力
3. 国際学術論文水準（発想力、解析力）の研究遂行能力
4. 議論に耐える強い・精緻な論理性
5. リーダーシップ・協調性・やり抜く意思

受講生の募集と選抜

受講生募集

平成26年度は、北海道全域から、平成27年度は道内を中心に全国から高校生の受講生を募りました。平成26年度は49名、平成27年度には98名の応募がありました。

一次オーディションによる選抜

意欲に基づいた、独自性、論理性、解析力を確認するため、インターネットを利用した課題遂行型テストを行いました。このテストもユニークなものとなっています。解答が一つではない課題を複数題用意し、応募者は一つの課題を4時間以内に解答用紙（A4用紙1枚）に記述し、事務局に送付します。1名の受講生につき2名の高等教育推進機構の教員で評価マトリックスに応じて採点を行います。平成26年度は39名が、平成27年度は70名が一次オーディ

ション合格となりました。

二次オーディションによる選抜

一次選抜者に対して、2泊3日（部活動大会や研究発表会に出席予定の者は別日程で1泊2日）の合宿形式のスクーリングを8月の夏期休暇に開催しました。このスクーリングでは、通常の高校授業では得られない高度な研究のための素養の習得と、外国人との実践的な意思疎通に必要なコミュニケーション能力及び、海外有名大学への入学が可能なレベルの英語力を体験することを目的としています。同時にこのスクーリングが二次オーディションを兼ねます。このスクーリングにおける複合的評価と一次選抜時の成績を加味してオーディションを行います。平成26年度は33名、平成27年度は31名が合格となりました。このメンバーで最先端の研究に取り組み、日本地球惑星科学連合大会の一般セッションでの研究発表を目指します。



写真3 高等教育推進機構における基礎講義研修時の受講生の様子



写真4 基礎講義の様子

北海道大学附属練習船おしよろ丸のSSP受講生の航海

平成27年度には、一次オーディションで優秀な成績を修めた受講生10名が、北海道大学水産学部が保有する附属練習船おしよろ丸のスーパーグローバル航海（函館湾近海）に参加しました。この航海は、本来は外国人留学生、研究者を対象とした研修プログラムであり、船内で行われる水産学部教員による授業も解剖実習などの活動も指示もすべてが英語という、特別な環境での実習航海です。高校生が参加できる研修プログラムとしては、おそらく日本で初めての実習航海となります。研究課題の一つとして、海洋プランクトンの分布や海水温といった情報を、衛星画像のスペクトル解析から明らかにし、実際の水産漁業活動に資する研究を行うことなどがあります。



写真5 おしよろ丸船内の様子（イカの解剖実習）



写真6 おしよろ丸と受講生の記念撮影

北海道大学大学院理学研究院附属天文台での研修

平成27年3月末の春休みを利用して、北海道大学大学院理学研究院附属天文台（名寄市）において、

4泊に及ぶ合宿研修もSSPのスクーリングとして開催しました。具体的な研修内容は、世界最大級の惑星観測望遠鏡を用いた、月、惑星、衛星、小天体の時系列観測、およびそれらの天体のスペクトル観測です。最先端の研究の現場を見るだけでなく、実際に解析・結果の解釈まで自ら受講生に体験してもらうことで、将来、トップレベルの科学者になるための素養を磨く場として位置づけています。また、夜間の天体観測の空き時間には、取り組んでいる研究の学会発表に向けての解析、および議論の場とし、普段インターネットを介して遂行している研究活動を加速することもこうした合宿研修の重要な目的です。



写真7 北大大学院理学研究院附属天文台での受講生の合宿研修の様子

受講生への国際性の付与

科学コミュニケーションの観点からは、ネイティブによる英語教育や国際学会での発表も一部では行われています。一方、従来の国際性の教育が、過度に語学教育に偏っているという印象もあります。我々は、科学研究において大切なのは、自分のアイデアや意思を相手に伝え、また自分が他人のそれを理解でき、さらにそれらを昇華させて新たなアイデアを生み出すことだと考えています。こうした能力は、外国語能力とはある程度切り離れたものとして、意識して教育する必要があります。SSPでは、研究レポートの提出などを通して、論理的で簡潔な文章を記述する教育を行っています。また、週1回のICTを利用した研究に関する議論において、外国人留学生チューター(TA)に参加してもらい、受講生に英語での積極的なコミュニケーションを促しています。これにより、理系の内容の英語への対応能力と、国際性にとって最も重要な積極的に発言する姿勢を引き出します。外国人との意思疎通に必要な実践的なコミュニケーション能力を涵養し、最終的には海外の大学への入学が可能なレベルの「語学力」をつけることを目標にしています。

最後に

北大GSCは、研究の基礎となる素養と国際的な成果発表などの基本的研究技法の習得に加え、いくつ

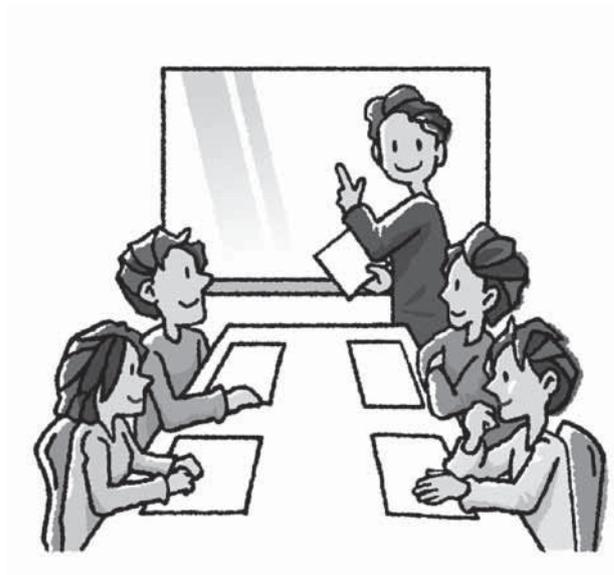
かのユニークな特色を持っています。すなわち、

- 1) 自由度の高い課題設定による自発的な研究企画力の喚起、
- 2) 単一実験ではなく、物理・化学・生物・地学が絡む複合的で、地球・惑星から顕微鏡まで含む北海道の地の利を活かしたマルチスケールな研究課題、
- 3) グループとしての研究協力活動に基づく個人の論理的議論展開能力の進展とリーダーシップの涵養、
- 4) 外国人留学生をチューターとして配置することによる、多様な英語での高度で実践的なコミュニケーション能力の開発、
- 5) 交通の便の悪さを克服するためのICTを用いたコミュニケーション・議論・講義の本格的な導入です。一方的にICTで講義をするスタイルではなく、文章や基礎講義を研究の進度に応じて画面共有をしながらマンツーマンで指導し、個の能力の進展を目指したり、学会発表練習をインターネット越しに行ったりします。実験、解析指導もICTを駆使して行います。こうした地道な取り組みから、理系の研究・教育を、高校生に対して遠隔で遂行するモデルを全国に先駆けて開発できたと自負しています。

北大SSPホームページ

<http://ssp.high.hokudai.ac.jp>

(成瀬 延康)



第2回キャンパスツアーを開催

8月11日(火)に第2回キャンパスツアーが開催されました。昨年度から新任教員研修の一環として行われている研修で、午前と午後の丸一日かけて実施しました。

午前は学内巡りとして、バスで移動しながら広い学内のさまざまな施設や自然を知ることができました。あいにく激しい雷雨に見舞われたため、バスから降りて歩くことはできませんでした。しかし、オープンキャンパスなどでも活躍しているキャンパスビジットプロジェクトの学生2名に案内役として参加してもらっていたため、参加者はバスの中からも十分に楽しく学ぶことができました。

午後からは、表1のスケジュールにあるとおり、教員の利用率が高い図書館の教育・研究面での活用

方法に関する研修、新しくなったELMSの使い方に関する研修を行った後、分科会として教室を分け、教員の支援を行っているURAステーションの活動紹介、特許の申請手順や学内ルールに関する紹介、最近増えてきた授業にオープンエデュケーションを活用する方法、出張申請や物品購入等で主に使用するSSOシステムの利用方法に関する研修を行いました。

午前中の雨の影響で、最後に予定していた交流会は中止となりましたが、17部局から参加していた29名の教員にとって、学内のことを知る良い1日になりました。

(山本 堅一)

表1 午後の研修スケジュール

13:35	「教育・研究に役立つ図書館の活用法について」(図書館職員)
14:40	「北海道大学の教育情報システム(ELMS)の利用について」 (オープンエデュケーションセンター・重田勝介准教授)
15:40	「北海道大学の倫理綱領について」(高等教育研修センター・細川敏幸教授)
16:00	分科会1 「北海道大学URAステーションの活動」(URAステーション・和田肖子URA) 「北大教員が知っておくべき知財制度と学内ルール」 (産学・地域協働推進機構・寺内伊久郎特任教授)
16:25	分科会2 「授業におけるオープンエデュケーション活用法」 (オープンエデュケーションセンター・藤田良治准教授) 「SSOシステムの使い方」(事務局職員)



写真1 北図書館西棟での図書館研修の様子



写真2 E209教室でのELMS研修の様子

2015年度IDE大学セミナー開催される

北海道支部のIDEセミナーが「高校・大学接続の将来像」をテーマとして以下のようなプログラムで、8月27日(木)～28日(金)にホテル札幌ガーデンパレスで開催されました。2013年に教育再生実行会議の第4次提言が公開され、一昨年末には中教審の答申として次期入試制度が発表されました。そこでは共通テストを毎年複数回実施し、段階別評価を導入することなどが提案されており、この案が採用されれば日本の高大接続のしくみは、大きく変わるこ

とになります。この制度に対応して、大学は入試制度と入学後の教育を、高校は教育内容を再構築することになるでしょう。

今年度のIDEセミナーでは、高大接続について積極的に活動している国内の事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画しました。なお、本セミナーには北海道内外から延べ103名が出席しました。

表1 プログラム

・特別講演 (1日目)「高大接続の「理想」は「現実」になるか？」	大阪大学 グローバルアドミッションズ オフィス長 教授 川嶋太津夫
・特別講演 (1日目)「学部横断型教育『21世紀プログラム』と多面的評価への指針」	九州大学 基幹教育院 教授 林 篤裕
・シンポジウム (2日目)「北海道における高大接続」	司会：北海道大学 高等教育推進機構 教授 鈴木 誠
シンポジスト	
小樽商科大学が模索する高大接続	小樽商科大学 理事・副学長 鈴木 将史
多面的評価の導入と入試改革	北海道科学大学 入試広報センター長 石田 眞二
高校現場からみた高大連携から接続への期待	北海道立教育研究所附属理科教育センター 金本 吉泰
大学入試改革への提言 ―ダビンチ入試からの示唆―	京都工芸繊維大学 教育研究推進支援機構 教授 内村 浩
多様化する高校と大学をどう繋ぐか? ～総合入試の試み	北海道大学 高等教育推進機構 准教授 池田 文人

特別講演

1日目最初の講演は、大学入試改革の現状を把握するために大阪大学の川嶋先生にお願いしました。以下は、その概要です。

ベネッセによる高校と大学を対象にした平成25年実施のアンケートでは、現在のセンター試験廃止には反対する一方で、新たな達成度テストやその複数回受験制度、大学による多面的入試、(英語などの)資格試験活用については好意的な意見が多かったそうです。

高大接続に関する検討は平成20年の答申「学士課程教育の構築に向けて」を受けて、平成24年から検討が始まり、8月には中間まとめが発表される予定です。これらの審議や答申から、高等学校基礎学力テスト(仮称)と学力評価テスト(仮称)の実施が

イメージされています。また、大学はこれらのテストを併用した多面的入試の実施が期待されています。改革スケジュールやその工程表も公表されており、平成32年度実施の予定です。しかし、中間まと

写真1 川嶋先生

め(案)では、「～を検討する」が40箇所以上に見られ、課題が多いことを示しています。

翻って国立大学の入試改革の歴史を見ると、課題となっている一般入試は私立大学でおよそ50%であることに對して、国立大学では85%に及びます。国立大学は三つのポリシーに基づく大学教育への質的転換をはかっています。大学間で共通のアドミッションポリシーを設定して入学試験を行うことが期待されます。いずれにしても、過去50年にわたり入試制度改革を少しずつ試みてきたのが国立大学の歴史です。今回は、本格的な改革になることを期待しています。

次の特別講演は、「21世紀プログラム」において多面的入試を他大学にさきがけて実施してきた九州大学の林先生でした。要約すると、2001年から募集を開始した21世紀プログラム(募集人員26名)は「専門性の高いゼネラリスト」をキーコンセプトに「創造を引き出す知識と基礎的な知識」や「外に開かれた知識」の理念のもと「21世紀を担う人材育成」を目標に学部横断型教育を行っています。従来の大学教育が学部・学科単位の教育システムであったのに対して、本プログラムに所属する学生は自分の興味・関心に応じて全11学部の講義を各自で取捨選択して履修し、卒業要件とします。入学者数(定員2,555名)に占める学生数は1%未満であるにも関わらず、彼らの学内だけでなく学外での活動は他の学生にも相互に良い影響を与えており、大学全体として活力ある学生を育成する環境の醸成に貢献しています。

写真2 林先生

本プログラムの入学試験は2段階に分かれ、第1次選抜では、志望理由書(2面)、調査書等(内申書)、

活動歴報告書(2面)から3倍程度(2015年には73名)に絞ります。2次試験では受験者を各16名程度5グループに分けます。受験者は講義を3回実施し、レポートは毎回提出し、その中から気に入ったテーマを一つ選び小論文を一つ提出します。次に、グループ毎に討論し、教員が面接します。これらの評価点を元に、選抜に参加した35名程度の教員が合議の上、順位を決定するわけです。判定に細かい事項を含むルーブリックは使っていません。志願者数はおよそ100名で推移しており、合格者は九州地方を中心に全国に広がっています。

この入試は非常に手間がかかりますが、プログラムの効果が大きいことから労力を惜しむべきではないと考えています。しかし、手がかかることから、この方法が今後の入学試験の主流となり得るかは不透明です。

シンポジウム

翌日のシンポジウムでは司会の鈴木誠先生が、道内の高大連携について概説した後、道内の3大学と道外の1大学ならびに高校教員が高大連携について説明しました。小樽商科大学からは副学長の鈴木将史先生が高大接続の取り組みについて話されました。小樽商科大学の高大連携は平成21年に締結された札幌市立高校9校との連携協定から開始され、夏休み中に行われる「高校生のための夏期連続講義」や、出前講義、高校訪問、高校からの本学訪問、オープンキャンパス、大学説明会への参加などを実施しています。連続講義では、毎年3-40名程度の高校生が訪れ、「小樽の街を探る!」などのテーマでアクティブ・ラーニングを実施しています。入試改革では、本年度から「グローバル人材」を評価する「グローバルマネジメント総合入試制度」(10%)、「総合的・多面的一般入試制度」(30%)を導入しました。これらの成果を検討し、平成30年度には新たな入試制度を発表する予定です。

北海道科学大学入試広報センター長の石田先生は、2014年4月に保健医療学部を新設し、北海道工業大学から名称変更した北海道科学大学の入試改革について話されました。北海道No.1の実学系総合大学を目指すブランドビジョンと「+Professional」というスローガンを掲げ、今年度から多面的評価を導入したAO入試プログラムを実施しています。新

しいプログラムは「新ガリレオセミナー」と呼ばれ、3回のセミナーを通じて、思考力や判断力、主体性、多様性についてルーブリック評価を用いて多面的に評価する仕組みです。セミナーには、PBL方式のグループディスカッションや実験・実習などの取り組みを加え、実学系総合大学の学びを体験できるものです。セミナー内容の予習・復習を可能にした記録ノート（ガリレオノート）を配布することで、学びの振り返りとルーブリック評価の各項目に対する自己評価を可能としています。AO入試募集定員89名に対し、今年度の参加申し込み者数は、AOセミナー参加者133名、新ガリレオセミナー参加者34名と盛況です。

次は、北海道立教育研究所附属理科教育センターの金本先生が高校の立場からの期待を述べられました。これまでの高大連携事業は、学習に対する生徒の興味関心を喚起することか、自分の進学先について考えさせることを目的として実施されてきました。しかし、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)などの指定事業を実施している高等学校の中には、連携授業を通して生徒に育みたい資質、能力及び態度をより明確にし、大学との深い連携を実践しようとする学校も出てきています。前任の北海道釧路湖陵高校(SSH)における高大連携では、1年次の連携授業として、野生動物研修、薬理学実習、毒性学実習を実施しました。その際、事前・事後指導の内容も含めて、北海道大学の教員と協議しました。これにより、大学教員と高校教員が連携して、高校3年間を通じた人材育成に挑戦できたのです。当初、「遠くの大学との連携は難しいのではないか」、「高校が求めている内容の授業を本当に実施してくれるのか」、「その活動は進学実績に結びつくのか」など不安がありましたが、円滑に運用できました。高校現場では、高大接続改革プランについては、まだまだ様子を見ているところが多いのですが、一方で「アクティブ・ラーニング」に関する関心は非常に高いと思います。成果を測定する方法は従来の入学者選抜試験に近いものにならざるを得ないのではないかという考えが主流ですが、真面目に一生懸命努力した生徒や、独自性をもった生徒が評価され

る大学入学者選抜システムの実現を期待しています。

京都工芸繊維大学の内村先生は、中教審が提案した新しい入試が導入された場合の、個別大学の対応、および高校教育への影響について予想しました。さらに、これまで14年間にわたって行ってきたダベンチ入試の経験に基づいて、中教審の高大接続答申の理念を具現化するための現実的な大学入試改革の構想を提案しました。すなわち、テスト理論などから見て問題の多い「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を撤回して、その代わりに新しい大学入試センター型の試験を開発します。その上で、各大学がそれぞれのアドミッションポリシーにもとづいて、多面的・総合的な評価を可能な範囲で行えばよいというものでした。

北海道大学からは池田先生が次のように説明しました。本学では、平成23年度から高校と大学を繋ぐ試みの一つとして「総合入試」を導入しました。総合入試では、理系(定員1027名)か文系(定員100名)かという大括りで受験・入学し、1年間かけて大学の多様性をじっくり学んだ上で進級します。進級は1年次の成績と本人の希望とにより決定し、二度に分けて振り分けます。一度目で各定員の80%(医歯薬獣は100%)、残りを二度目で振り分けます。これまでほぼ全員が進級しており、うち約90%が進級先に満足しています。一次振り分けでの第一希望への進級率は約70%です。この結果から、総合入試は概ね期待通りの成果を上げていると思われます。今後は、さらなる追跡調査により総合入試の長期的評価を行うとともに、高校での多様な学びを入試でどのように評価していくかを検討します。

(細川 敏幸)

アクティブ・ラーニング導入ワークショップを開催

9月1日(火)13時30分から3時間、高等教育推進機構S棟S5講義室において、アクティブ・ラーニング導入ワークショップが開催され、学内16部局と9他大学から44名の参加がありました。

最初に、高等教育推進機構の三上直之准教授から「少人数授業におけるアクティブ・ラーニングの手法」と題した講演があった後、高等教育研修センターの山本堅一特任准教授からは「大人数授業におけるアクティブ・ラーニングの手法」と題した講演があり、その後、参加者が自身の授業にアクティブ・ラーニングの手法を取り入れるためのワークセッションを高等教育推進機構の飯田直弘准教授によるファシリテーションの下、行いました。ワークセッション

では、参加者個々人で考えた後、グループ内で共有・意見交換を行いました。講師の他に高等教育推進機構の研究部から4名の教員が参加し、参加者からの活発な質問に答えていました。

本ワークショップは、高等教育研修センターが昨年7月末に文部科学省から「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点」として認定されたことを受けて他大学にも開放した最初の研修となりました。アクティブ・ラーニング型授業への転換が世界的に求められている昨今の状況もあり、多くの大学から参加申し込みがあり、関心の高さが窺えました。

(山本 堅一)



写真1 会場の様子



写真2 グループ討論の様子

第27回北海道大学教育ワークショップを開催

本学では毎年、着任後5年以内の教員を対象とした宿泊型の新任教員研修を実施しています。今年度は、高等教育推進機構に新しく設置された高等教育研修センターが企画し、9月8日(火)から9日(水)の2日間に渡って、北海道大学高等教育推進機構を会場に開催しました。学内16部局と7他大学から35名の参加者が5つのグループに分かれ、各グループで一般教育演習の新たな授業を提案し、表1のプログラムに沿ってシラバスを作成し、本ワークショップのテーマである「学生主体型授業の設計」について学びました。

シラバスの作成には、「講義題目・目標の設定」「授業方略」「教育評価」の3つのセッションをそれぞれレクチャーとグループ討議、発表とフィードバックを1セットとして行いました。また、ワークショップではシラバス作成以外のセッションとして、これまでの教育活動をふり振り返り自らの教育観について改めて認識するとともに、他の参加者の教育観を知ることによって多様性に触れるワークショップ、参加者の授業に関する悩みについてグループで解決策を考えるワークショップ、そしてシラバスを校正する時間も取りました。シラバスの校正は、世話人として参加

している高等教育推進機構の教員が添削を行い、参加者は添削に基づき再校正を行い、最後に世話人が確認して返却しました。

第27回目を迎えた当ワークショップでは、初めて学内開催としたところ、子育て等家庭の事情からこれまで参加できなかったという人が見られたので、来年度以降もホテルでの合宿形式と学内開催形式の

両方を提供し、より多くの教員に参加していただけるようにしたいと考えています。

また、アンケート結果を分析し、参加者にとってより深い学習の場となるようなワークショップにできるよう、引き続き検討していきます。

(山本 堅一)



写真1 グループ討議の様子

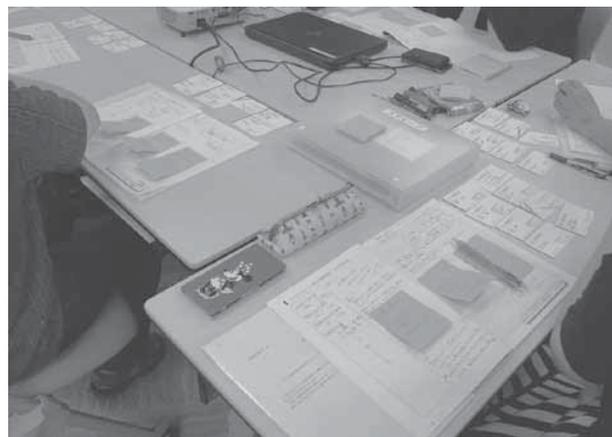


写真2 ワークショップの様子

表1 第27回北海道大学教育ワークショッププログラム

2015年9月8日(火)		2015年9月9日(水)	
8:30	受付開始(高等教育推進機構S講義棟S5講義室)	9:00	各グループ修正
8:45	開会・挨拶	9:30	《個人提出課題》参加者のシラバス再提出
8:55	オリエンテーション	9:30	レクチャー3「適切な成績評価」
9:30	ワークショップ「自分の教育観について考える」	10:00	グループ討議「教育評価」
10:30	休憩	11:00	休憩
10:45	レクチャー1「講義題目・目標の設定」	11:10	作成したシラバス「学生主体型授業」の発表
11:15	グループ討論「講義題目・目標の設定」	12:00	講評
12:15	休憩	12:30	レクチャー4「教育倫理」
13:15	中間発表「講義題目・目標の設定」	12:40	《個人提出課題》参加者のシラバス返却
13:45	《個人提出課題》参加者のシラバス校正作業	12:45	修了証書授与式
14:05	ワークショップ「授業に関するQ&A」	13:00	閉会
15:05	休憩(シラバス提出)		
15:25	レクチャー2「授業方略」		
15:55	グループ討論「授業方略」		
17:25	中間発表「授業方略」		
17:55	《個人提出課題》参加者のシラバス返却		

第2回TF研修会を開催

9月17日(木)に第2回TF研修会が開催されました。本学で今年度から開始されたTF(ティーチング・フェロー)制度とは、大学院博士課程の大学院生を対象に、大学院教育の一環として、教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで、教育能力を高め将来指導的役割を果たす人材を養成することを目的とした制度です。学士課程教育をより一層充実させることも目的としています。TFに採用される学生は定型的な授業において、教員の管理下において講義や採点、授業の企画ができるようになるため、本研修会などのTFを担う上で必要な知識等を学ぶ研修の修了を義務づけ、事前に理解を深めてもらうこととしています。

本研修には、17部局から66名の参加者があり、表1にあるとおり、新田孝彦高等教育推進機構長の挨拶から始まり、「TFとしての心構えと教育倫理綱領の理解」、「シラバスの構成と意味」、「評価の機能と

種類」、「クラス・マネジメント」といった、TFを担当する上で知っておくべき知識に関する講義が行われました。昼の休憩を挟み、午後は2教室に分かれてグループワークを行いました。グループワークのテーマは、「教育者としてのTFに求められるものは何か?」と「学習者としてのTFに求められるものは何か?」の2つで、各教室6、7グループを編成して1時間議論した後、発表と全体討論を行いました。

参加者のTFへの期待は高く、研究者としてのみならず教育者としての経験を早めに積みたいという熱意を感じる研修会となりました。3月9日には、今年度TFを担当した学生が集まって振り返りを行う研修会を開催し、改善点やTF制度の更なる可能性等について検討する予定になっています。

(山本 堅一)

表1 第2回TF研修会のプログラム

<午前の部>：全体会(高等教育推進機構 N2教室)		<午後の部>：アクティブ・ラーニング実習 (小教室に分かれる)	
9:15	受付	担当者	E208：細川敏幸, 山本堅一
9:30	挨拶：高等教育推進機構長(新田孝彦)		E214：山田邦雅, 三上直之
9:35	講演：TFとしての心構えと教育倫理綱領の理解 (細川敏幸)	13:30	グループ学習入門
10:05	講演：シラバスの構成と意味(山田邦雅)	14:00	グループ討論
10:35	休憩	15:00	全体発表・討論
10:50	講演：評価の機能と種類(山本堅一)	16:00	終了
11:20	講演：クラス・マネジメント(細川敏幸)		



写真1 午前の部の様子



写真2 午後のグループワークの様子

講習会「教育情報システム (ELMS) の活用方法」を開催

10月9日(金)16時30分から90分間、オープンエデュケーションセンターの重田勝介准教授を講師として、「教育情報システム (ELMS) の活用方法」と題した講習会が開催されました。

本講習会は、昨年度末に更新された教育情報システム (ELMS) の利用方法を周知し、授業等における活用を促進するために高等教育推進機構E棟のパソコン端末室で実施し、13部局から31名の参加者がありました。

重田先生には、事前に参加者から聞いた質問事項への回答だけでなく、質疑応答の時間も取っていただき、参加者と活発な意見交換が行われました。実際

にELMSの操作をしながら説明を聞いたことで、参加者は理解を深めることができました。

授業支援システムの一つであるELMSの活用を促進するため、今後もこのような講習会を開いていきたいと考えています。

(山本 堅一)



写真1 講演を行う重田勝介准教授

写真2 講習を受ける受講者

学生の主体的な学習を促す 授業スキルワークショップを開催

10月14日(水)18時15分から90分間、学生の主体性を引き出す授業スキルワークショップが開催され、学内19部局と7他大学から35名の参加がありました。

このワークショップは、例えば授業中に居眠りする学生が見られる場合に、「やる気のない学生が多いからだ」とか、「授業内容が難しくつまらないからだ」といったような学習者側に原因を求めるのではなく、まずは私たちの授業の進め方を見直してみようという考えのもと、授業開始前や授業中に学習者の主体性を引き出し、維持する教員のスキルを学んで身につけるために開催されました。

ワークショップは、高等教育研修センターの山本堅一特任准教授による講演を中心に、適宜質疑応答を交えて参加者と意見交換しながら進められました。参加者のアンケート結果には「説明がとても分かりやすく勉強になりました。途中で近くの方と話しが出来たのも良かったです」、「学生自身が、やる

気にならなければ何も変わらないこと、つまり、やる気にさせることの大切さとスキルを学ぶことができました。明日から、取り入れていきたいと思えます」などといった意見が見られ、参加者の満足度が高いワークショップになりました。

(山本 堅一)



写真1 ワークショップの様子

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

大学IRコンソーシアムワークショップ， セミナーが開催される

本学も会員校である大学IRコンソーシアムが主催する，ワークショップとセミナーが10月23日（金），24日（土）に東京の甲南大学，関西学院大学，本学サテライトキャンパスを会場として開催されました。本コンソーシアム設立校のひとつである本学の3名（細川，徳井，宮本）は主催者側として参加しました。

23日のワークショップは，コンソーシアム会員校向けに，IRの実践やその過程で感じている疑問等を議論し，理解し合うことを目的に開催され，29名の参加がありました。最初に，玉川大学より「IRデータの活用とIR体制」に関する先進的な事例の紹介がありました（写真）。その後，初めての試みとして，参加者がテーマごと（①各大学のIRオフィスの運営・運用について，②IRデータの大学ガバナンスへの活用，③IRデータの教育への活用，④IRデータの収集）にグループワークで議論し，成果を発表するという形で進められました。様々な組織形態の大学からIRを担当している教職員が参加し，4つのテーマに限らず積極的な意見交換がなされ，次のような課題が浮かび上がりました。

- ・データは各部署からIR担当へ集まるようになったが，どのように分析し，どのように結果を活用（フィードバック）すればいいのかを模索している。
- ・人材が不足している。IR専門の人材の不足とそもそも担当者が少ないために満足にデータを活用することができない。

コンソーシアムでは，これまで，会員校が共通の調査票を用いた学生調査を行い，IR活動を推進してきましたが，各校の活動状況を具体的に知り，担当者同士が忌憚なく議論する機会は今回が初の試み

でした。他校の状況を知り，多くの情報交換ができ，参加者にとって大変有意義な場となりました。

24日には，コンソーシアム非会員校向けに「大学IRの現在とIR活用について」と題し，セミナーを開催しました。会場の都合上断らざるを得ないほど申込が多数あり，最終的に定員を超える62名の参加者となりました。セミナーでは，設立校である同志社大学と本学からそれぞれの大学におけるIR活動の現状に関する講演とコンソーシアムで運用するシステムと入会に関する説明がありました。また，その後の情報交換会でも活発な議論がなされました。

ワークショップ，セミナーには，北海道から九州まで全国の大学からの参加があり，IRに関する関心の高さを伺わせる盛況ぶりとなりました。主催者側としては，IR活動を牽引していく立場にあります。我々の取り組みを発信するだけでなく，このようなIR担当者が議論できる機会を設けることが重要となるでしょう。これを機会にIR活動に関する大学間の交流が大いに進むことが期待されます。

（宮本 淳・徳井 美智代）



写真1 ワークショップの様子
（提供：大学IRコンソーシアム）

学生支援 STUDENT SUPPORT

特別講義「大学と社会」を開講

— 10人の卒業生が後輩に熱弁 —

全学教育の特別講義「大学と社会」を開講していきます。

本講義は、平成10年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。社会の第一線で活躍する本学の卒業生が後輩にあたる主に1年生を対象に、学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき、受講生である学生は、これらの講義を通じて、大学生生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

今年度は、1年生を中心に65名の学生が受講して

おり、表1のとおり、9人の卒業生に講師としてお話をいただきました。多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただきました。

毎回30分程度の質疑応答の時間を確保していましたが、時間が足りなくなるほど数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

なお、科学技術コミュニケーション部門の協力によりFacebookの「いいね！Hokudai」(<https://www.facebook.com/Like.Hokudai>)で各講師を紹介中です。
(亀野 淳)

表1 平成27年度 「大学と社会」 スケジュール

①10月1日(木)	○ ガイダンス (亀野)
②10月8日(木)	○ 本授業の意義, 目的など (三上) ○ キャリア意識アンケート
③10月22日(木)	○ PROG (自己分析) の実施
④10月29日(木)	陶山 千里 氏 (株)ディスコ 事業推進本部新卒メディア開発部学生広報課課長代理) ◇水産学部卒
⑤11月5日(木)	利光 立行 氏 (日本国土開発(株) 土木本部土木部土木企画グループ) ◇工学部卒
⑥11月12日(木)	○ PROG (自己分析) の結果配布, 説明
⑦11月19日(木)	三崎 正晃 氏 (日本マイクロソフト(株) コーポレート営業第一本部 担当部長) ◇農学部卒
⑧11月26日(木)	金田一真優 氏 (KIN Sugar Labo. 主宰) ◇法学部卒
⑨12月3日(木)	河合淳一郎 氏 (キリン株式会社 R&D本部 飲料技術研究所) ◇理学部卒
⑩12月10日(木)	伊藤 慎 氏 (大塚製薬株式会社 医薬営業本部PMGニュープロ) ◇薬学部卒
⑪12月17日(木)	○ 中間まとめ
⑫1月7日(木)	高岡 幸生 氏 (リージョンズ株式会社 代表取締役) ◇法学部卒
⑬1月14日(木)	新里 勝宏 氏 (北海道保健福祉部健康安全局地域保健課地域保健グループ主任技師 (歯科医師)) ◇歯学部卒
⑭1月21日(木)	山崎 夏生 氏 (日本野球機構 審判技術委員) ◇文学部卒
⑮1月28日(木)	○ 最終まとめ



写真1 講義の様子1



写真2 講義の様子2

「インターンシップ成果発表会」開催される

去る11月4日(水)に「インターンシップ成果発表会」が、高等教育推進機構とキャリアセンターの主催により開催され、学生約30名、企業・団体等関係者約20名の参加がありました。

この成果発表会はインターンシップ終了後の学生に、その成果を振り返り、今後の学生生活やキャリア形成に役立てるために実施したものです。また、インターンシップ参加者だけではなく、今後インターンシップに参加したいと思っている学生にも参加していただきました。

まず、夏季休暇中にインターンシップに参加した学生の中から、中谷操希さん(理学部3年:産業技術総合研究所)と荒木里美さん(経済学部3年:北洋銀行)の2名に10分程度の成果発表をしていただきました。

その後、5つのグループに分かれて「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシッ

プの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」というテーマでグループディスカッションを行いました。このグループディスカッションでは、自分の参加したインターンシップをもう一度振り返り、その内容をグループ内で共有しながら意見の集約を図りました。その後、各グループから3分程度の発表がありました。多くの建設的な意見が出ましたが、多くのグループから「社員さんとの交流やフィードバックがほしい」との意見が出されました。

それを踏まえ、参加した企業・団体の関係者から「気負わず積極的にチャレンジしてほしい」など前向きなコメントをいただきました。

こうした形式の成果発表会は初めての試みでしたが、学生、企業関係者とも満足度が高かったことから来年度以降もこのような成果発表会を開催していきたいと考えています。(亀野 淳)



写真1 成果発表の様子



写真2 グループディスカッションの様子

科学技術コミュニケーション オープンエデュケーションセンター CoSTEP部門

サイエンス・カフェ札幌がグッドデザイン賞を受賞

2015年9月29日、公益財団法人日本デザイン振興会が主催するグッドデザイン賞の「地域・コミュニティづくり／社会貢献活動」の部門において、CoSTEPの応募作品「触媒としてのサイエンス・カフェ札幌 ～北海道大学 高等教育推進機構 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) の10年間の取り組み～」が受賞する運びとなりました。

グッドデザイン賞は1957年に通商産業省（現在の経済産業省）によって「グッドデザイン商品選定制度」として創設され、およそ60年近く継続されてきた賞で、作品は有形無形を問わず、プロダクトデザインから社会貢献活動といった取り組みまで幅広く対象としています。

日本でサイエンスカフェという文化が徐々に広がり始めた2005年から現在にいたるまで、CoSTEPは紀伊國屋書店札幌本店1階のインナーガーデンにて「サイエンス・カフェ札幌」を、86回に渡り開催してきました。CoSTEPではサイエンスカフェをはじめとする科学技術コミュニケーション活動を広く周知し、認知度をさらに高める目的で、昨年4月に2015年度グッドデザイン賞に応募することにしました。

本稿ではサイエンス・カフェ札幌が無形のデザインである社会貢献活動としてグッドデザイン賞を受賞した意義及び受賞後に開催された展示会などについて報告します。

【サイエンス・カフェ札幌の特色】

応募作品名に「触媒としての～」と添えてるのはサイエンス・カフェ札幌が研究者と市民をつなぐハブとなった結果、単なるサイエンスカフェに留まらず、周囲に好影響をもたらし、新たなプロジェクトや出会いを生み出していったためです。具体的にはサイエンス・カフェ札幌を通じて知り合った仲間が集って、新たなコンセプトのサイエンスカフェを企画したケースや参加者として来場した学生がゲストの研究者の話の聞いて、その後その研究室に入っ

て活躍したケースなどが挙げられます。また、教育的な側面では受講生が主体となって運営されている点がとても重要です。北海道大学の大学院生を中心に構成されている受講生が研究者と市民をつなぐ役割を経験することで、将来その受講生が研究者になった時、自分の研究テーマを基に熱心なアウトリーチ活動に取り組んでもらいたいと私たちは考えています。10年以上の実績のあるCoSTEPにおいて、「継続は力なり」という言葉を痛感する瞬間があります。サイエンス・カフェ札幌を経験した修了生が各地でサイエンスカフェなどのアウトリーチ活動を活発に行い、その成果を実際に耳にする時です。これは“持続可能な実践的教育”が成立している状態といっても過言ではありません。

ひとつの事柄がそれだけで完結せず、有機的な結

写真1 交流しながら議論する市民

写真2 研究者と市民の対話

びつきから連鎖的に新たなシーンを生み出していくサイエンス・カフェ札幌の特色とはまさにこの触媒の機能であると考えます。

【受賞の意義】

サイエンス・カフェ札幌がこれまで積み上げてきた成果に対し、有形無形に関係なく総合的なデザインを評価・推奨する日本で唯一の制度であるグッドデザイン賞から外部評価を得られたということが最も重要であると考えています。今後もこの路線を継続しながら、その時々によって創意工夫を加え、CoSTEPのサイエンス・カフェ札幌は進化していくこととなります。

北海道大学の組織として初の受賞であるという点も重要です。CoSTEPは科学技術コミュニケーションの教育研究活動を進めていますが、同時に教育を通じたアウトリーチ活動を担っている組織でもあります。グッドデザイン賞の受賞によって、北海道大学の社会貢献活動に対する姿勢を全国に示すことができたのは意義があったと考えます。

目に見える効果として、今後のサイエンス・カフェ札幌にて、Gマークの自由な使用が可能になった点が挙げられます。公益財団法人日本デザイン振興会によれば、Gマークの認知度は87%を超えてい

ます。サイエンス・カフェ札幌のチラシ、ポスター、WebページでGマークを活用することで、これまで以上に強く訴求できることでしょう。

【審査委員の評価】

グッドデザイン賞の審査は部門ごとの審査委員が行うことになっています。CoSTEPが応募した「地域・コミュニティづくり／社会貢献活動」の選考は以下の5名が担当していただきました。

- ・山崎 亮氏／東北芸術工科大学デザイン工学部
コミュニティデザイン学科
学科長
- ・南雲 勝志氏／ナグモデザイン事務所 代表
- ・上田 壮一氏／多摩美術大学 客員教授
- ・横川 正紀氏／株式会社ディーアンドデルーカ
ジャパン 代表取締役
- ・色部 義昭氏／日本デザインセンター
色部デザイン研究室 主宰

以下は審査委員による評価コメントの引用です。特に教育面での成果を評価されている点が印象的でした。また、CoSTEPの特色のひとつであるデザイン性の高さにも言及されており、細かく審査の目が行き届いていたのだということを強く感じました。



写真3, 4 グッドデザイン賞のGマークを掲載したチラシ。CoSTEPデザイン実習の受講生が制作

“各地でサイエンスカフェは行われているが、学生が主体となることで実践的な学びの場となっていること、地域に根ざしたテーマを積極的に取りあげることで、大学と地域を結ぶ試みになっていること、さらにはウェブサイトを通じた情報コミュニケーション、受講生による自発的なサイエンスカフェの実施など、質を向上させながら10年以上継続している点が高評価となった。各回のフライヤーやポスターのデザインにも、タイトル付けからグラフィックに至るまで参加者目線の工夫が随所に見られ、ありきたりなサイエンスカフェから一線を越えていこうというデザイナーの想いが溢れている。”

【受賞展を教育活動の場に】

グッドデザイン賞では受賞作品を一同に介した受賞展「GOOD DESIGN EXHIBITION」を東京都港区の東京ミッドタウンで毎年開催しています。今年度は10月30日～11月4日の日程で行われました。会期中は多数の修了生や関係者にご来場いただき、CoSTEPの展示スペースは終始賑やかで、これまでサイエンス・カフェ札幌が紡いできた人と人の強いつながりを再確認する場となりました。

また、CoSTEPが実施している「リサーチ&ライティング実習」にて、受賞展取材する機会を設けることで、受賞展そのものをCoSTEP受講生の教育活動の場として活用することもできました。具体的には、実習を希望した受講生4名(今井奈央子さん、間冬子さん、道林千晶さん、奥聡史さん)に、「グッドデザイン賞と科学技術コミュニケーション」というテーマのもと、科学技術とデザインを融合させた受賞作品が製品化された背景やコンセプトを調査し、デザイン分野における科学技術コミュニケーションの意義や、将来的にもたらされる社会的な影響および新たに生まれるコミュニケーションの可能性を考察してもらいます。

参加してくれた受講生はいずれもCoSTEP選科Bの受講生であり、10月にライティングスキルを学ぶ3日間の集中演習を終えたばかりの状況だったため、本実習は実践的なアウトプットを行う腕試しの場として絶好の機会となり、4人とも受賞展での取材を意欲的に行っていました。各展示スペースを

丁寧に見学し、関係者がいればすぐに声をかけて、作品のコンセプトを熱心に聞いていました。

4人の中で唯一、取材対象そのものをサイエンス・カフェ札幌にした、奥聡史さんの取材の様子を紹介します。札幌在住の奥さんは現地入りする前から資料を集めたり、CoSTEPの現役スタッフに取材したりして、準備に余念がありませんでした。現地入りしてからは、元・CoSTEPスタッフの隈本邦彦さん(現・江戸川大学メディアコミュニケーション学部 教授)にも取材をし、可能な限り多くの関係



写真5 受賞展サイン



写真6 受賞展会場入口の様子



写真7 CoSTEPの展示パネル

者の言葉を集めて、過去から現在までのサイエンス・カフェ札幌を理解しようと努めていました。

なお、本実習の成果はCoSTEPレポートやCoSTEP公式サイトにて発表予定で、前者については北海道大学学術成果コレクション「HUSCAP」への登録を行います。

【受賞報告】

12月4日、山口佳三総長に受賞報告を行いました。新田孝彦理事(副学長／高等教育推進機構 機構長)より10年間の活動実績について説明すると、山口総長より「明日からも、大学と社会を結ぶ新たな対話の場づくりに精進してほしい」と有り難い激励の言葉を頂戴しました。

写真8 審査委員の南雲勝志先生と

写真11 山口総長にグッドデザイン賞の受賞を報告

写真9 CoSTEP受講生, 修了生, 隈本先生と



写真10 グッドデザイン賞の表彰状

写真12 山口総長, 新田理事, CoSTEPスタッフで記念撮影

【謝辞】

サイエンス・カフェ札幌にご参加いただいた数多くの市民の皆様, 支援していただいている紀伊國屋書店札幌本店の皆様, それからゲストとして協力してくださった北大研究者の方々に対し, この場をお借りして厚く感謝申し上げます。

(村井 貴)

新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

映像教材の開発について

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター 准教授 藤田 良治

2015年2月にオープンエデュケーションセンターに着任いたしました。私の専門は、博物館と映像の関係性に着目した新たな研究分野である「博物館映像学」です。博物館映像学は、映像を学術標本と捉え、映像を収集・保存し、その活用について研究するものです。

オープンエデュケーションセンターでは、インターネット上で公開する映像教材の制作を行っています。映像は動きを表現できるため、「見てわかる」情報伝達ツールとして教育分野で効果的に活用できます。視聴者の理解を促進する映像を制作するために、制作者には映像機器の操作や編集スキルだけでなく、映像教材全体の設計を考慮した企画力も必要です。伝えるべき目的を明確にし、どのように見せることが効果的かを考えながら映像教材制作を行います。

映像教材は、授業で教材の使用を希望する教員とオープンエデュケーションセンターのスタッフが協力して制作していきます。制作の過程で、教員とスタッフが打合せを重ね、映像教材で伝えるべきこと、

理解すべきことを明確にします。次に、映像教材に挿入する資料の画像や文献などの著作権処理を行います。権利者から許諾を得るには時間もかかりますが、お互いの権利を尊重し合う重要な手続きです。収録の方法は大きく分けて2種類あります。教員がタブレット端末に資料を提示し音声とともに収録する方法と、ビデオカメラで授業や実習の様子を収録する方法です。教員がカメラを前にするとうまく言葉が出ない、動きがぎこちなくなるといった場合には、適切なアドバイスで「いつもどおり」の授業を収録します。収録した映像を、スタッフが一つ一つ丁寧につなぎ、テロップやナレーション、BGMなどが必要な場合は、これらの補完情報を加え映像教材の編集を行います。最後に、関係者間で内容を確認して公開します。

私が着任してから間もなく1年が過ぎようとしています。映像教材制作の実務に取り組みスタッフのスキル向上を目指し、学内で教材制作するメリットを最大限に活かした北大らしい映像教材の開発を実現します。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任准教授 葛西奈津子

2015年4月1日付で、オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) に特任准教授として着任しました、葛西奈津子と申します。専門分野は、サイエンスライティングです。

出身は札幌市です。京都大学理学部で生物学を学

び、卒論のテーマは「魚類における胸鰭の筋肉系の比較解剖」です。大学卒業時には、研究者としてではなく科学を専門とする執筆業 (当時は、科学技術コミュニケーションという言葉はまだありませんでした) に就くことを希望していたため、学際領域の勉強ができる進学先として、京都大学に新設された

人間・環境学研究科に進みました。修士論文研究は、趣味として続けていたトライアスロンのアイアンマンレース（水泳3.9km/自転車180.2km/マラソン42.2km）での経験を元に、超持久運動による疲労の評価とその意味を研究・考察しました。博士後期課程単位認定退学を機に独立し、以来、フリーライター、フリー編集者として活動してきました。

趣味と専門を生かして仕事の幅を広げる中で、自分のスタイルの1つとしてきたのが、学会や研究者の要望に応じて、取材執筆やリライトなどを行うものです。また教科書出版社の外部スタッフとして、文部科学省検定教科書等の編集業務を行ってきました。高等学校の生物分野を中心に、複数回の学習指

導要領改訂により理科教育のあり方が変遷してきた現場に立ち会うことができました。

こうした経験を経て、はじめて大学教員になりました。実際の仕事を通して身に付けてきたサイエンスライティング、科学技術コミュニケーションを受講生に伝えていきたいと奮闘しています。

住まいは、2010年に移住したニセコにあります。北大に着任後は、勤務日は札幌、休日はニセコと往復しています。私にとってサイエンスは、研究室ではなくニセコにあるものです。

大学教育においては経験がありません。皆様のご指導をよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教 種村 剛

2015年4月、高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) に着任いたしました、種村剛と申します。吉田民人先生の下で、社会学および社会情報学を学びました。ライフワークとしている研究テーマは「日本における責任観念の形成」です。少し紹介します。たとえば、A) 「上司から指示された仕事を、きちんと遂行して結果を出すこと」は、組織の中で「仕事の責任を果たした」とみなされるでしょう。一方、B) 「指示を待たず、自分の考えで意思決定し、行為の結果を引き受けること」もまた「自己決定と自己責任」といわれます。特定の状況では、対立することもありうる二つのふるまい方が、どちらも「責任を果たす」ことになるのです。これは裏をかえせば、一方の側の「責任を果たす」ふるまいが、もう一方の側からみれば「無責任」と評されることがあるということです。

このとき私が考えたい問いに次のものがあります。1) A) やB) のような、責任概念の使い方が、日本でいつ、どのような文脈で登場したのか。2) 二つの責任判断——「いわれた仕事を遂行すること

は責任を果たすことである」「自分の意思決定には、責任が伴う」——を矛盾なく根拠づけることはできるのか、できるとすればどのような根拠付けに基づくものなのか。3) 個別的な状況、たとえば、上司からデータを改ざんすることを指示された技術者は、A) よりも、B) の側に立ち、上司の指示を否定することが求められるでしょう、一方の責任よりももう一方の責任が重視されるとするならば、その理由はなにか、等々です。

CoSTEPでは「対話の場の創造」実習を担当しています。この実習では、受講生と共に、専門家と市民を繋げるサイエンスカフェを企画し、実施しています。これからの社会では、専門家と市民の間の信頼の醸成が必要不可欠になっていきます。そして、信頼を担保する要件には、私の研究テーマの責任があります。今後は、CoSTEPで専門家の責任と信頼について研究しながら、この二つを促進するような科学技術コミュニケーションを実践していくつもりです。CoSTEPの主催するサイエンス・カフェ札幌ともども、よろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教 村井 貴

昨年4月に高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) に着任しました, 村井貴と申します。専門分野は「ウェブデザイン」です。

近年はこれまで培ってきたクリエイティブスキルを無償で社会に還元する活動に注力しています。事例を紹介します。2011年10月にスタートした, 「ヒバリ～震災義援音楽配信プロジェクト～」では東日本大震災の被災地に送る義援金を募るため, 世界の現代音楽の作曲家100名に新譜を書いていただき, その演奏データを私が中心となって制作したウェブサイトで一年間かけて配信しました。おかげさまで多くの義援金が集まり, プロジェクトとしては十分な成果を収めることができました。義援金につきましては朝日新聞厚生文化事業団を通じ, 被災地に届けられたと聞き及んでいます。

一昨年からは松岡正剛先生が代表を務めていらっしゃる編集工学研究所との取り組みを進めています。

編集工学研究所は帝京大学メディアライブラリーセンター (MELIC) と連携し, 学生同士によるソーシャルリーディングを展開しています。そのプラットフォームであるMELIC公式サイトのレスポンシブウェブデザインを手掛けさせていただきました。他にも松岡先生の「千夜千冊」のサイトリニューアルも進めていますが, 複雑な構造と圧倒的ボリュームの前に難儀しているところです。達成した暁には, 私のクリエイティブスキルはおそらく今よりも高まっているであろうと信じ, 日々努力を続けています。

私が着任したCoSTEPでは実践的教育を行っています。そういった環境の中で, 私がこれまでに進めてきたウェブを中心とした取り組みの経験を活かし, 学生の指導に励む所存です。至らない点が多々あると思いますが, みなさまのご迷惑にならないよう一生懸命改善してまいりますので, ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター

科学教育コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教 朴 炫貞

2015年4月に科学教育コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) に着任しました朴炫貞 (パク・ヒョンジョン) と申します。専門は造形芸術, その中でも映像制作やワークショップ企画で, 造形博士という変わった学位を持っています。北海道大学にはアートの実技専攻部署がないことから, 美術の世界で生きてきた私にとって, 北大やCoSTEPは一つのチャレンジ, よい刺激であります。

映像制作の中でも, 私はカメラを通して身の回りにあるものを発見することを目指したメディアアート作品をつくっています。同時に, 映像原理に注目

して映像ワークショップを企画・進行しております。例えば, 子どもの描いた絵をそのまま動かしてつくるアニメーションプロジェクト「コードモーション」や, 福島の子どものたちがインスタントカメラで写真を撮ってモノゴトを発見するワークショップ「シュン・プロジェクト」などがあります (前回のニュースレターにもCoSTEPワークショップの様子を投稿させていただきました)。映像をつくるためには技術も必要ですが, 今において「じっと見つめて考える力」がより大事であります。

アートはなんとなくカッコよくも難しくも感じて

しまう固定観念があります。しかし、アートは自由に自分のメッセージを表現することです。今まで培ってきた自分の視点から少し違う角度でモノコトを見つめ、自分の方法で表現してみることは、分野を超えて楽しむ、つかえる手法でもあります。多様な発想や表現や融合されることで、より豊かになる大学、社会を目指して国際交流も積極的に行ってい

きたいと考えています。

独自の視点から、CoSTEPではサイエンスとアート・デザインを、人と人を、国と国をつなぐ役割を果たせればと思います。自然の圧倒的な力と学生のエネルギーに囲まれて、変わり者でありながら常に刺激になれることを目指して、楽しいことをつくっていきたいと思っています。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 新渡戸スクール 特任助教 今井匠太郎

2015年9月1日付けで高等教育推進機構新渡戸スクールに特任助教として着任いたしました今井匠太郎と申します。

以前は同じく北海道大学の理学研究院附属原子核反応データベース研究開発センターにて研究員として所属しておりました。

専攻は「理論原子核物理」ですが、核データセンターにて内閣府推進プロジェクトであるImPACT「核変換による高レベル放射性廃棄物の大幅な低減・資源化」に関わったことから、複数の専門分野の研究者や企業が集まって革新的な成果を目指すということに大きな興味を持ちました。同時に、教育にも関心を持っており、これまでいくつかの非常勤

講師の経験を持っておりました。北海道大学では本年度から新渡戸スクールという新しいプログラムがスタートしており、その趣旨が専門分野を学ぶ大学院生が各部局から集まることで多分野・多文化に触れる教育機会であると知り、関わってみたいと思っておりました。幸いなことに、教員として新渡戸スクールに参加することができ、大変喜んでおります。

専任教員としての教育の場に携わることは始めてであり、大きな期待と大きな不安を抱いておりますが、一步一步確実に貢献していきたいと考えております。若輩者ではありますが、皆様のご指導よろしくお願いたします。

着任のご挨拶

高等教育推進機構 新渡戸スクール 特任助教 Ravankar Ankit (ラワンカル・アンキット)

I am Ankit Ravankar from India. I joined Nitobe School at the Institute for the Advancement of Higher Education at Hokkaido University from October 1st, 2015 as a specially appointed Assistant Professor. I completed my Masters and PhD studies from the Graduate School of Engineering, Hokkaido University in 2012 and 2015 respectively.

My research areas are in the field of Robotics and Artificial Intelligence particularly related to intelligent navigation and mapping techniques for mobile robots. In my PhD study I tried to develop solutions for indoor mapping system for mobile robots that can be used for search and rescue applications. During this period, I was also active

with several international student activities in the graduate school and at Hokkaido University and served as a chairman of international student association. After finishing my PhD, I had a wonderful opportunity to join Nitobe School at Hokkaido University. Nitobe School is a special graduate program that brings student from different research backgrounds, culture and

languages together and creates a unique learning experience for them. As part of Nitobe School, I am working towards designing and developing new course curriculum that brings active learning contents to the classroom. I strive to work towards the betterment of education at Hokkaido University through Nitobe School and hope to get cooperation from many esteemed faculties here.

日誌 EVENTS, August–November

8月

- 1日 (行事) 第1回新渡戸スクールメンター講演会・交流会
- 1日～4日 (行事) オープンキャンパス (札幌キャンパス)
- 3日 (会議) 第4回高等教育推進機構運営委員会
- 3日 (行事) オープンキャンパス (函館キャンパス)
- 4日 (会議) 第1回大学院共通教育専門委員会
- 5日 (行事) 「2015サイエンスパーク」に出展『ごはんはカラダを通してどこへ行く?—アニメで体験しよう!』(CoSTEP)
- 7日 (行事) 第3回新渡戸カレッジフェロー講演会
- 11日 (行事) 第2回新任教員向けキャンパスツアー
- 16日 (説明会) 主要大学説明会 (福岡)
- 22日 (説明会) 北海道大学進学相談会 (東京)
- 24日 (会議) 第1回大学IRコンソーシアムワークショップ部会・広報部会 (TV)
- 26日 (会議) 第4回教育改革室会議
- 26日 (会議) オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 27日～28日 (会議) 第65回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会 (山形大学)
- 30日 (説明会) 主要大学説明会 (広島)
- 31日 (会議) 第2回大学院共通教育専門委員会

9月

- 1日 (会議) 第1回新渡戸スクール教務専門委員会

- 1日 (行事) アクティブ・ラーニング導入ワークショップ
- 2日 (会議) 第79回教務委員会
- 2日 (会議) 第2回高等教育推進機構学務委員会
- 4日 (会議) 全学教育科目責任者会議
- 6日 (行事) 北大セミナー in函館
- 6日 (説明会) 主要大学説明会 (札幌)
- 7日 (会議) 第2回クラス担任等連絡会
- 8日～9日 (行事) 第27回北海道大学教育ワークショップ
- 9日 (会議) オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 9日 (会議) 第2回オープンエデュケーション専門委員会
- 10日 (会議) 第2回新渡戸カレッジ教務専門委員会
- 10日 (会議) 第2回大学IRシステム運営部会 (TV)
- 15日 (行事) AXIES-csd 第2回研究会 (富士通株) (共催) (オープンエデュケーションセンター)
- 17日 (会議) 第1回高等教育研修専門委員会
- 17日 (行事) 第1回全学教育TF研修会
- 24日 (行事) 学部・学科等移行ガイダンス
- 25日 (会議) 第2回新渡戸カレッジ運営会議
- 25日 (行事) 学部・学科等紹介
- 26日 (行事) ホームカミングデーでのキャンパスツアー
- 27日 (行事) 第83回サイエンス・カフェ札幌「地区をめぐる冒険～オープンストリートマップを使ったまちづくり～」(CoSTEP)

- 29日 (会議) 第5回教育改革室会議
- 29日 (会議) 第5回高等教育推進機構運営委員会

10月

- 6日～14日 (行事)
 - AO入試・帰国子女入試願書受付
- 9日 (行事) 教育情報システム (ELMS) 講習会
- 10日 (行事) 北大セミナー in北見
- 10日 (行事) 北海道大学進学相談会 (名古屋)
- 11日 (行事) 北海道大学進学相談会 (大阪)
- 11日 (行事) TEDxHokkaidoU 2015 (共催)
(CoSTEP)
- 14日～16日 (会議)
 - 第6回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 15日 (会議) 第2回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 16日 (会議) 第2回新渡戸カレッジフェロー交流・研究会
- 17日 (行事) 「出版ネットフェスタ2015in京都」に出展『CoSTEPセミナー』
- 17日 (行事) 第3回新渡戸カレッジグループ・ミーティング
新渡戸カレッジ進路支援セミナー
- 17日～18日 (行事)
 - 新渡戸カレッジ10月学内合宿
- 18日 (行事) JJSCを読む会 (CoSTEP)
- 19日 (会議) 北海道地区FD・SD推進協議会幹事会
- 21日 (行事) CoSTEPセミナー
～ Think about forest ～
- 22日 (会議) オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 23日 (行事) 大学IRコンソーシアム会員校向けワークショップ (東京)
- 23日～29日 (会議)
 - 第7回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 24日 (行事) 第2回新渡戸スクールメンター講演会・交流会
- 24日 (行事) 大学IRコンソーシアムセミナー (東京)
- 25日 (行事) 「札幌デザインウィーク」に出展
『チ・カ・ホ農学校 ～細胞工作研究

所で作って学ぼう!～』(CoSTEP)

- 27日 (会議) 第6回教育改革室会議
- 27日 (行事) 第4回新渡戸カレッジフェロー講演会
- 28日～29日 (研修)

北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」

- 31日 (行事) 秋のキャンパスツアー

11月

- 1日 (行事) 秋のキャンパスツアー
- 3日 (行事) ワークショップ「はじめての人にもわかるマッピング」(CoSTEP)
- 4日 (会議) 入学者選抜委員会
- 4日 (会議) 第2回IRシステム運用部会 (TV)
- 4日 (行事) AO入試・帰国子女入試第1次選考結果発表
- 5日～7日 (行事)
 - 第3回新渡戸カレッジ対話プログラム
- 11日 (行事) 第4回新渡戸セミナー
- 12日～13日 (会議)
 - 平成27年度国立七大学共通教育主幹部局長会議・主幹部局事務協議会 (大阪大学)
- 14日・16日 (行事)
 - 英語発音力講座
- 15日 (行事) AO入試・帰国子女入試第2次選考日
- 16日 (会議) 第3回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 19日 (会議) 第5回全学教育専門委員会
- 19日 (行事) 第84回サイエンス・カフェ札幌「数学のメガネで生物を見てみよう!～数理モデルで解き明かす自然界の謎～」(CoSTEP)
- 20日～21日 (行事)
 - 第28回北海道大学教育ワークショップ (北広島)
- 24日 (会議) 第3回大学院共通教育専門委員会
- 25日 (会議) 第2回総合教育移行専門委員会
- 26日 (会議) 第3回学生委員会
- 26日 (行事) 第5回新渡戸カレッジフェロー講演会
- 27日 (会議) 第3回総合教育教務・学生専門委員会
- 30日 (会議) 第7回教育改革室会議

行事予定 SCHEDULE, January-March

◆1月

- 5 (火) 授業再開
- 12 (火) 月曜日の授業を行う日 (火曜日の授業は行わない)
- 15 (金) センター試験準備 (休講)
- 16 (土) ~17 (日)
大学入試センター試験
- 27 (水) 初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)
- 28 (木) 木曜日の授業終了日
- 29 (金) 金曜日の授業終了日

◆2月

- 1 (月) 月曜日の授業終了日
- 2 (火) 火曜日の授業終了日
- 3 (水) 水曜日の授業終了日 (第2学期授業終了日)
- 4 (木) 午後 学部・学科等移行ガイダンス
- 5 (金) 学部・学科等紹介
- 10 (水) 成績報告締切 (常勤 [Web入力], 非常勤 [帳票])

- 17 (水) 全学教育科目成績Web上公開
- 17 (水) ~18 (木)
全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 17 (水) ~23 (火)
(H26年度以前入学者・自由設計科目登録変更期間)
- 18 (木) 私費外国人留学生入試第2次選考
- 25 (木) ~26 (金)
一般入試個別学力検査等 (前期日程)
- 29 (月) 正午 全学教育科目成績確定
- 29 (月) 午後 第1年次進級判定
- 29 (月) 午後~3月18日 (金)
学部・学科等移行手続き (第1回志望調査~各学部振り分け)

◆3月

- 12 (土) 一般入試個別学力検査等 (後期日程)



ニュースレター 2016, No.104 目次

(巻頭言) 高等教育研修センター 細川 敏幸	1		
北海道大学グローバルサイエンスキャンパス実践報告 「北大スーパーサイエンティストプログラム：SSP」	3	大学IRコンソーシアムワークショップ，セミナーが開 催される	18
第2回キャンパスツアーを開催	8	特別講義「大学と社会」を開講 — 10人の卒業生が後輩に熱弁 —	19
2015年度IDE大学セミナー開催される	9	「インターンシップ成果発表会」開催される	20
アクティブ・ラーニング導入ワークショップを開催	12	サイエンス・カフェ札幌がグッドデザイン賞を受賞	21
第27回北海道大学教育ワークショップを開催	12	新任紹介	25
第2回TF研修会を開催	14	日誌	29
講習会「教育情報システム (ELMS) の活用方法」を 開催	15	行事予定	31
学生の主体的な学習を促す授業スキルワークショップ を開催	15	目次・編集後記	32

編集後記

今号もたくさんさんの報告記事を載せることができました。活動が活発であること、とても嬉しく思います。北海道の冬は寒く、雪の影響もあって行動範囲が狭まるものですが、今シーズンは暖冬で、これまでのところ積雪量も随分と少ないですね(ニュースレターが出る頃までには、俗に言う「帳尻合わせ」でドカ雪が降っているかもしれませんが)。

冷え性で寒がりな私にとっては、少しでも寒さが和らぐことは大いに歓迎です。こたつに入っている時間、ストーブの前から離れられない時間を少しでも削減し、たまっている仕事をさくさくとこなして研究や趣味の時間を増やしたいものです。皆さんにとってはどのような暖冬になっているのでしょうか。

(Ken)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第104号

発行日： 2016年1月30日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
編集委員：◎細川敏幸・木村純・鈴木誠・飯田直弘
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521
インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>